

みなとの博物館による港の賑わい創出

～船の科学館、名古屋海洋博物館、横浜みなと博物館の取り組み～

かとう ゆう だい いい ぬま かず お かとう ひろ し しまむね みち こ
加藤 祐大* 飯沼 一雄** 加藤 浩司*** 島宗 美知子****

国土交通省港湾局では、全国各地に存在する、港に関する文物を所蔵、研究並びに展示する博物館等（以下「みなとの博物館」という。）の振興を図っている。みなとの博物館における代表的な事例として、船の科学館、名古屋海洋博物館、横浜みなと博物館で実施している地域活性化の取り組みを紹介する。

1. はじめに

四方を海に開かれたわが国にとって、古来より、港は人々の暮らしと深く結びつき、港を発祥の地として発展してきた都市が多数存在している。

本稿では、港の役割や歴史を紹介し、さらに情報発信や交流の拠点として非常に貴重な役割を担っているみなとの博物館における取り組みについて紹介する。

2. 東京港の保存展示船 初代南極観測船“宗谷”

1) 船の科学館

船の科学館は、今から46年前の1974年（昭和49）7月20日、海と船の文化をテーマとした海洋博物館として開館した。

開館から4年後の1978年（昭和53）、海上保安庁に所属し初代南極観測船として名を馳せた“宗谷”

（2,734総トン）が現役引退することになり、保存誘致活動に全国11の自治体等が名乗りを上げるなか、最終的に当館が指名を受けた。

2) “宗谷”受入れと建築基準法

1978年（昭和53）10月、東京港竹芝棧橋で解役された“宗谷”は1億1,500万円で国有財産の払下げを受け、有識者による宗谷委員会も設置され保存展示方法の検討を開始した。そうした矢先、建設省（当時）より「船籍が無くなれば建築基準法を適用」との見解が示されたのである。無論、1938年（昭和13）建造の船が建築基準法に適合する訳もなく、日本建築センターの評定を受け安全性を確認、所要の改装を行う計画として建築基準法第38条（大臣認定）の認定を得て、わが国初の建築確認による改装を行い、検査済証を取得した船として一般公開を開始した。

3) 建築物でありながら係留船に？！

こうして、船であり建築物として公開を開始した“宗谷”だったが、10年ほどした1989年（平成元）新たな法規制問題が生じた。今度は、運輸省（当時）が船舶安全法を改正し、係留船も同法の適用対象としたのである。“宗谷”は建築確認を得ていたにもかかわらず、非自航船として新たに係留船として定期検査・中間検査を毎年受検しなければならなくなった。



写真-1 初代南極観測船“宗谷”と
東京国際クルーズターミナル（背後）

* 国土交通省 港湾局 海洋・環境課 03-5253-8111（代） ** 公益財団法人 日本海事科学振興財団 学芸部 調査役（学芸員） 03-5500-1111（代）
*** 公益財団法人 名古屋みなと振興財団 管理第二課長（学芸員） 052-652-1111（代）
**** 公益財団法人 帆船日本丸記念財団 学芸課長補佐 045-221-0280（代）

4) さらに移転で新たな法的問題が？！

建築物となり、再度船舶安全法の適用も受け、一般公開を継続する“宗谷”に、2014年（平成26）また新たな難問が生じた。東京都は、晴海に代わる新たな旅客船ふ頭について13号埋立て地の前面水域に建設することを決定、“宗谷”はその取付け道路に重なることから移転を検討せざるを得なくなった。

東京都港湾局との協議の末、移転先は対岸と決まり機能保障で費用全額を都に負担いただけることになったものの、敷地外への移動ということで建築確認の再申請が必要となった。大臣認定で検査済証を取得した“宗谷”の35年後の現行法規に基づく再申請は、ほぼ不可能に近い大改造を行わない限り実現不可能。そして、それでは文化財としての価値も失うことになる。これで万事休すと思いきや、ちょうど建築基準法の改正が行われ、窓口の江東区都市整備部建築課の働き掛けもあり、再開発の曳家の例に準じ既存不適格のまま別敷地への移転が可能となった。さらに、江東区都市景観条例、江東区みどりの条例、東京都福祉のまちづくり条例等いくつもの新たな難題をクリアし、何とか対岸移転を終えて公開を継続できることになった。

5) まとめ

“宗谷”は海軍特務艦時代の逸話や初の南極観測事業を成功に導いたことから「奇跡の船」とも呼ばれる。しかし、このように保存展示船となってからも幾多の試練に直面、その度に苦難を克服して来たのである。

東京港の新たなランドマークとなる東京国際クルーズターミナルは、コロナ禍の影響で開業が約2カ月遅れ9月10日となった。海外客船の寄港もない寂しいスタートとなったが、来年は華やかな外航クルーズ船が多数訪れると共に、多くの乗客が隣接する“宗谷”にも足を運んでくれることを期待したい。

このように、日本の海と船の文化を伝える保存展示船は、地域活性化や観光資源としても重要な存在だ。海洋立国の文化財であり観光資源である保存展示船の存在を、“宗谷”をご見学いただき再認識いただければこれに勝る喜びはない。

3. 親しまれる港づくり

～名古屋海洋博物館と名古屋港水族館～

1) 知られざる日本一

現在、名古屋港は取扱貨物量をはじめ数々の点で日本一を誇る。だがその事実は当の名古屋市民にもあまり知られていない。名古屋の街中で道行く人に名古屋港の印象を訪ねても「日本一の港」と答える人はまずいないだろう。多くの市民にとって名古屋港とは「水族館のあるところ」というのが第一印象なのである。

地下鉄名港線の名古屋港駅から徒歩数分、「名古屋港ガーデンふ頭」には水族館や名古屋海洋博物館をはじめとした「市民に親しまれるための施設」が集まっている。

2) 名古屋港のランドマーク「ポートビル」

1984年（昭和59）、それまで物流と生産に特化した港であった名古屋港に新たなランドマークとして「名古屋港ポートビル」がオープンした。地上53mの展望室からは、広さにおいても日本一である名古屋港を一望できるだけでなく、御岳山や知多半島、鈴鹿の山並みなども堪能できる。このポートビルの中に、海・船・港を紹介する、いわゆる海事博物館として併設されたのが「名古屋海洋博物館」である。

その1年後、ポートビルのすぐ隣に、引退した南極観測船“ふじ”が南極の博物館としてオープンした。「海事博物館を作るならぜひ本物の船も展示したい」ということから誘致に乗り出した地元の期待が実ったのである。



写真-2 名古屋港ポートビル（左）と南極観測船“ふじ”

3) 「南極への旅」～名古屋港水族館開館～

“ふじ”オープンからさらに7年、“ふじ”の向かい側に「名古屋港水族館」がオープンした。展示総水量、延べ床面積日本一を誇る巨大水族館である。展示テーマは「南極への旅」。“ふじ”がたどった航路に従い「日本の海」から「南極」までの5つの展示エリアが順を追って展開するという構成となっている。

その後、イルカやシャチのいる新館のオープンを経て、名古屋港水族館は入館者数全国3位（2017～2019年度は3年連続入館者数200万人超）という東海地方屈指の人気施設となっている。また、楽しめるだけでなく、生物の生態や環境について学べるよう教育普及事業にも努力している。

4) 30周年を機にリニューアル

2014年（平成26）、名古屋海洋博物館は開館30周年を機に2度目となる大規模リニューアルを行った。CGでリアルに再現された名古屋港内で操船体験ができる「操船シミュレータ」や、**ガントリークレーン***の操縦体験ができる「ガントリークレーンシミュレータ」など最新の技術を用いた展示を追加し、より楽しく学べる施設になった。

その2年後には、南極観測船“ふじ”も展示部分を大幅にリニューアル。4面スクリーンの中に立つことで、まるで自分自身が南極や現役当時の“ふじ”の船上にいるかのような感覚が楽しめる「極感ドラマチックシアター」をはじめ、南極に興味のなかった人でも楽しんでもらえる施設となった。

5) まとめ

博物館では、港の役割は「物流・生産のための港」「防災のための港」「市民に親しまれる港」の3つであると紹介している。

名古屋港ガーデンふ頭エリアは、東海地方屈指の人気スポットとなっている。これからも名古屋港がより多くの方に「楽しく過ごす」「興味を持って学ぶ」ことができる場所として機能するためにも、水族館や博物館の果たす役割は大きい。

4. 帆船“日本丸”と横浜みなと博物館のボランティア活動

1) 帆船“日本丸”と横浜みなと博物館

帆船“日本丸”は1930年（昭和5）建造の練習船として知られ、54年間の現役時代に11,500人もの学生が実習で乗船し、船員養成に多大なる貢献をした。

1984年（昭和59）の引退後、横浜市のみなとみらい21地区で保存され船内を公開しており、2017年（平成29）には国の重要文化財（美術工芸品）に指定された。

隣接する横浜みなと博物館は、1989年（平成元）に開館した海事博物館である。2009年（平成21）にリニューアルし、横浜港の歴史と役割を伝える展示を行っている。

両施設ともに多数のボランティアが活動し、施設の魅力を高めている。活動の一端を紹介する。



写真-3 帆船“日本丸”と横浜みなと博物館
（右側の低い建物）

2) 帆船“日本丸”のボランティア

帆船“日本丸”では、年間12回程度、29枚全ての帆を広げる「そうほんてんぼん総帆展帆」を実施している。この展帆作業を行うのが、展帆ボランティアである。毎回80人程が参加し、財団職員の指示のもと、帆を広げ、たたむ作業に協力している。「太平洋の白鳥」と呼ばれた優美な姿が再現されると、多数の観客から大きな拍手が寄せられる。

この総帆展帆は、1985年（昭和60）から35年間継続し、横浜みなとみらい地区の名物イベントとして定着した。

帆船“日本丸”には、このほかに船内を案内するガイドボランティア、また甲板や真鍮磨きなど整備作

業に協力する甲板ボランティアも活動している。

3) 横浜みなと博物館のボランティア

博物館では、2009年（平成21）から展示案内と教育活動ボランティアが導入された。

展示案内ボランティアは、横浜みなと博物館の常設展示の説明やガイドツアーを実施している。博物館では年に3回程度研修を行っているが、ボランティアのみなさんも大変熱心で、自主的に横浜港に出かけたり、近隣他館の展示を見学、またお互いに情報交換して横浜港について学習を重ねている。

博物館の体験型イベント活動をサポートする教育活動ボランティアは、主に土日祝日に船の折り紙教室や船のペーパークラフト教室等を館内で実施している。主に子どもを対象としているが、大人の方や外国人の方も参加している。身振り手振りや英語をまじえて作り方を説明し、立体的な船ができあがると、参加者から歓声があがることもしばしばである。



写真-4 博物館内の船のペーパークラフト教室の様子

4) まとめ

帆船“日本丸”と横浜みなと博物館のボランティアの活動は好評で、参加された方々から「娘がとても喜んだ！」等の礼状が届くことも多い。ボランティア活動は、施設のファンづくりに欠かせないものになっている。

一方で活動するボランティアにとっても、参加された方々からのねぎらいや感謝の言葉が励みとなり、また帆船や横浜港についての学びが生活のアクセ

ントになっているとの感想も寄せられている。生き生きとしたボランティアの姿が、帆船“日本丸”と横浜みなと博物館のホスピタリティに厚みを増していると感じている。また、充実したボランティア活動が、さらなる施設の魅力アップへとつながるよう活動環境を整え、横浜港の地域活性化や観光資源としての価値向上にもつなげていくことができればと考えている。

5. おわりに

港は私たちの生活や社会経済にとって、必要不可欠な社会基盤だが、その歴史や役割に触れる機会は少ない。

みなとの博物館では、港の歴史や役割について人々に分かりやすく紹介する施設として、また、港における情報発信や交流の拠点として地域の賑わい創出や発展の実現に繋げていきたいと考えている。



みなとミュージロー
(みなとの博物館の案内人)

【用語解説】

※ガントリークレーン

……コンテナ埠頭に設置される貨物の積み卸しを行うためのクレーン。橋桁を走行脚の外側に張り出すことで、貨物の積み卸し範囲を広くできる特徴をもつ。